

## 「論文」

### 日本人中高校生の英作文における複合動詞 — ゼロ動詞派生名詞とその対となる動詞の観点から —

山本史歩子

#### Abstract

The aim of this paper is to examine the frequency of zero-deverbal nouns (e.g., a look, a visit, etc.), their corresponding verbs (e.g., to look, to visit, etc.), and composite predicates (e.g., take a look, make a visit, etc.) in the English composition of junior and high school students based on the Japanese EFL learner corpus (JEFLC Corpus). Further, the use of them in the students and that in native speakers of English taken from Wordbanks online are compared.

This paper has revealed that Japanese students had considerable difficulties in understanding the parallel between zero-deverbal nouns and their corresponding verbs, which could be one of the crucial factors in the extremely low frequency of use in composite predicates in their writings. In addition, they showed a lack of knowledge of verbs in composite predicates which suffer semantic bleaching and thus come to function as filling a syntactic slot.

In conclusion, it is desirable to make the student aware of the structure and productivity of composite predicates through analogy and inferencing.

#### 1. はじめに

##### 1.1 目的

日常的に大学生の英作文を添削する教員の多くは、読解力の高い学生でもいざ書くということになると、読むこととの間にかなりの隔たりがあると感じているのではないだろうか。具体例を挙げるならば、学生たちは関係副詞や分詞構文等を解釈するのにさして苦労はしないが、それらの構文を英作文では避ける傾向が観察される。英作文は理解構文と使用構文の差が如実に反映される。

構文以外にも注目すべき点はコロケーション、特に複合動詞 (e.g., take a look, make a visit, etc.) の使用頻度の低さである。山本 (2017) では、日本人大学生と英語を母語とする大学生のエッセイにおける複合動詞・句動詞・複合前置詞 (e.g., in terms of, in (with) relation to, etc.) の使用頻度を分析した結果、句動詞に関しては日本人大学生の方が高い使用頻度が確認されたが、複合動詞と複合前置詞に関しては、英語母語話者の約半分であったことが報告されている。

本稿の目的は、JEFLL Corpus に基づいて日本人中高校生の英語学習者を対象に複合動詞を使用するための前提となる動詞派生名詞 (e.g., a look, etc.) とその対となる動詞 (e.g., to look, etc.) 及び複合動詞 (e.g., take a look, etc.) の認識の程度、使用パターン及び頻度を検証する。更に、Wordbanks online を用いて英語母語話者との使用パターンと頻度を比較し、最後に複合動詞の使用頻度の低さの要因について考察をする。本稿で扱うコーパスについては、3.1 節のデータと分析方法で再度言及をする。

## 1.2 複合動詞

複合動詞は、形式上「基本動詞 (do, give, have, make, take) + (不定冠詞) + 動詞派生名詞 + (前置詞)」から構成されている (e.g., take care of, make a wish, give a cry, etc.) (Nickel, 1968; Dixon, 1991; 相沢, 1999; Brinton and Akimoto, 1999)。

基本動詞は統語上動詞の位置を占める文法的機能を果たし、その意味は動詞派生名詞が担う。動詞派生名詞については、動詞と同形のゼロ派生名詞 (e.g., make a guess/guess), 音声上関係している名詞 (e.g., give advice/advise), 派生接辞が付く名詞 (e.g., have an argument/argue), 語源的に関係する名詞 (e.g., have a thought/think) まで幅がある (Brinton and Akimoto, 1999: 2)。基本動詞と動詞派生名詞は必須項目であるが、不定冠詞と前置詞の有無は任意である。しかしながら、複合動詞は不定冠詞が動詞派生名詞に先行する形式が一般的とされている。複合動詞の構造はいたってシンプルであり、その意味は動詞派生名詞から推論可能である点において、英語学習者の使用を妨げる要因が一見すると認められない。

## 2. 先行研究

複合動詞は通時的 (秋元 (編), 1994; Brinton and Akimoto, 1999; Claridge, 2000), 共時的 (Nickel, 1968; Live, 1973; Nunburg et al., 1994; 相沢, 1999) の両

側面から多くの貴重な研究がなされている。Brinton and Akimoto (1999: 17-18) は、通時的観点から複合動詞の発達は名詞の抽象化に伴う脱範疇化、統語的再分析（動詞と名詞が1つのユニットとして機能）などのプロセスを経ていることから文法化と捉えているが、Traugott (1999: 257-259) は、文法化は内容語（名詞、動詞、形容詞など）が文法的機能を果たす方向へと発達することから、複合動詞の発達は語彙化であり、その後にイディオム化した例としている。共時的観点から、相沢 (1999: 210-211) は、複合動詞の使用域に着目をし、新聞・小説・学術書における複合動詞の動詞を調べた結果、学術書では知的活動や思考による伝達行為を表す名詞と結びつく *make* 複合動詞の使用頻度が高かった。一方、主観的で日常生活の活動を表す名詞と結びつく *have* 複合動詞は極めて低い頻度であった。同じ複合動詞でも使用域が異なることを提示している。

単純動詞には見られない複合動詞の特徴は複数認められる。1つは、単純動詞の不在 (e.g., *do homework, make an effort, etc.*) (Quirk et al., 1985: 751-752)。次に、複合動詞の相的機能 (aspectual function)。複合動詞を構成する不定冠詞 *a/an* の介在によりゴールが暗示された1度きりの出来事・行為、換言すれば、*atelic* な行為（終点は含意されない）を *telic* な行為（完遂・完了）へと変えることが可能になることを示唆している (e.g., *move/make a move*) (Live, 1973; Wierzbicka, 1984; Brinton and Akimoto, 1999)。次に、英語に特徴的な文末重点の観点から、Quirk et al. (1985: 1401-1402) は、動詞によってはSV (e.g., ‘*she replied.*’) だけで構成される文は稀であり、それを補う手段の1つとして複合動詞 (e.g., ‘*she made a reply.*’) を用いるのがより一般的としている。最後に、Koskeniemi (1977: 83-84) は、弱強詩脚の韻律 (*iambic meters*) を用いるドラマや無韻詩 (*blank verse*) では、文末に複合動詞を置くことで（強勢を受ける名詞を置くこと）、文に快音調的なリズム (*euphonic cadences*) を生むと論じ単純動詞にはない複合動詞の優位性を主張している。

他にも、複合動詞の統語上の柔軟性が認められる。Brinton and Akimoto (1999: 2-3) は、修飾語句の挿入の容易性 (e.g., *make a big impact vs. \*impact bigly*) を挙げている。Nickel (1968: 15-16) は、関係代名詞の先行詞への取出し (e.g., ‘*The grin she gave with this remark nearly put Dixon right off his stroke.*’) を挙げ、複合動詞の“*descriptive force*” (記述力) が使用増加の動機の1つになっていると述べている。また、Nunburg et al. (1994: 520) も、複合動詞の統語的柔軟性を示す二重受動化 (e.g., ‘*Advantage was taken of the students.*’, ‘*The students were taken*

advantage of.')

英語教育におけるコロケーション習得の重要性についても多くの重要な研究がなされている (Sinclair, 1991; Lewis, 2000; De Cock, 2000; 堀, 2009; 小屋, 2015)。Sinclair (1991: 109-110) は、英語のテキストを読み込む際に2つの原則 (the open-choice principle と the idiom principle) が働くが、基本的にはイディオムの原則が最初に働き、それが不適切と認識されると自由選択原則に基づいて適切に解釈されるとしている。ゆえに、英語母語話者の記憶には、膨大な量の 'semi-preconstructed phrase' 言わば「半固定化したフレーズ」が貯蔵されており、必要に応じて即座にそのフレーズを組み合わせて理解するので、独立した語よりもイディオム、チャンクの解釈が優勢になり、多くの語はコロケーションの形で使用されることを指摘している。

英語学習者にコロケーションを教えることの利点として、Hill (2000: 53) は、英語母語話者の言語活動の70%以上が何等かの形のコロケーションで処理されていること、堀 (2009: 26-27) は、語は単独では用いられず他の語との関係で意味が決定されていること、Nation (2001)、Nesselhauf (2003) は、英語母語話者のような流暢な言語活動の実現には欠かせないことなどの観点から、英語学習者にコロケーションを教えることが英語学習の有効的な手段の1つであると論じている。更に、Hill (2000: 54-55)、Nation (2003: 320) は、英語母語話者は発話の際や聞くとき一語一語で認識をしているのではなく、チャンクで認識をして反応することにより、速いスピードでの言語処理が可能になることを指摘している。

また、教室で複合動詞を教える際のコロケーションリストの作成は日常的に使用されるものを提示することが重要とされているが (Lewis, 2000: 167; Nation, 2003: 328, 335)、小屋 (2015: 40-42) によれば、複合動詞を含めたコロケーションを詳細に解説している英語の教科書はほとんどなく、教科書によって扱っているコロケーションも異なる。加えて、教科書に掲載されている複合動詞と英語母語話者が日常的に使用する複合動詞とは使用パターンにかなりの隔たりがあることが報告されている (Koya, 2004)。

複合動詞に関する研究は様々な領域でなされているが、動詞と動詞派生名詞の使用頻度を出发点とした複合動詞の研究はほとんどなされていない。

### 3. 分析

#### 3.1 データと分析方法

本稿では、JEFLC Corpus をもとに頻度分析を行う。JEFLC Corpus は、日本人の中学生と高校生約 1 万人が書いた英作文を収集したコーパスで、規模としては 669,281 語を収録している。サブコーパスとして、中学生と高校生の別、学年・国立・公立・私立の別、各学校の偏差値の別、テーマ別など詳細に絞ることができるが、全例を分析対象とする。<sup>1</sup> JEFLC Corpus の比較対象となる英語母語話者のデータは、Wordbanks online から抽出をする。Wordbanks online は、Harper Collins 社が作成した Bank of English (約 6 億 5 千万語を収録した最大規模のコーパス) の内公開されている 102,813,738 語からなるコーパスである。

JEFLC Corpus は日本人中高校生の英語学習者コーパスであるので、比較対象となる英語母語話者のコーパスは、英語を母語とする大学生のエッセイを収録した LOCNESS (the Louvain Corpus of Native English Essays) が考えられるが、学習者コーパスは、母語話者でも非母語話者であってもテーマや書いた環境(辞書の有無、制限時間など)によって使用される語彙や構文が左右される問題を抱えている (Biber and Reppen, 1998; 飯尾, 2013)。Aijmer (2002: 63-65) は、イギリス英語を収録している LOB Corpus (the Lancaster-Oslo/Bergen corpus) と LOCNESS を基に法助動詞 *must* の根源的使用 (deontic use) と認識様態的使用 (epistemic use) の使用頻度を分析した結果、前者では根源的使用が認識様態的使用の 2 倍確認されたが、後者では両使用は同程度であったことを報告している。つまり、英語母語話者であっても、学習者コーパスの場合必ずしも一般的な傾向を反映しているとは一概には言えない。<sup>2</sup> また、『中学校学習指導要領解説 外国語編』(2017: 93) では、「実際の言語の使用場面や言語の働き」などを考慮した教材の創意工夫が求められている。従って、本稿では複合動詞の一般的な使用状況を提示するために、Wordbanks online の *usbooks* (fiction & non-fiction, 1988-1995, 5,410,682 語) を使用する。Wordbanks online のサブコーパスには他に新聞・パンフレット類・雑誌があるが、これらのジャンルでは本が最も中道的であると言える。<sup>3</sup>

本稿では、データが日本人中高校生による英作文であること、動詞と同形の動詞派生名詞は単音節から成る単純な語であることが多いこと、同形の使用比率の検証の重要性を考慮し、ゼロ動詞派生名詞(以下動詞派生名詞とする)を構成素とする複合動詞を分析の対象とする。動詞派生名詞は相沢 (1999: 86-87)

が代表的とする複合動詞の中から、中学生で習得する語を選択した（scream と escape は高校生で習得する語）。次例参照。

- (1) a. 身体活動：give a cry, have a laugh, give a scream, give a shout, have a smile  
 b. 身体動作：have/make an escape, take/have a look, make a stop, make a visit, take/have a walk  
 c. 知的活動：give an answer, have/make/take a guess, give an order, give/make a report, have a talk  
 d. 意志行為：take care (of), have a hope, make a promise, give/have a try, make a wish

一般的に、類義関係にある動詞派生名詞は同じ動詞と共に起る傾向が認められており、プロトタイプ的な複合動詞の習得が周辺の複合動詞の習得を容易にするとされている。例えば、take medicine から take a pill, take a tablet (Nation, 2001: 325-328)。

### 3.2 身体活動：cry, laugh, scream, shout, smile

最も基本的な身体活動を表す動詞派生名詞、単純動詞及び複合動詞の頻度分析の結果を表1に示す。D-Noun (Deverbal Nouns) は動詞派生名詞を、CP (Composite Predicates) は複合動詞を指す。身体活動を表す動詞派生名詞は、have や give と共起することが多く観察される。

注目すべき点は、英語母語話者と比較して日本人高校生は動詞派生名詞の使用が極端に低く、scream は5%、laugh は3%、cry と shout にいたっては1例も確認されていない。ただし、例外的に smile だけが39% (D-Noun と CP との合算) と高頻度で使用されているが、動詞派生名詞の smile という認識よりむしろ日本語に「カタカナ英語」として定着している「スマイル」からの想起であると推察される。動詞派生名詞は、その名の通り動詞から派生した名詞、言

表1 JEFLL Corpus と Wordbanks online における身体活動を表す動詞派生名詞、動詞及び複合動詞

	JEFLL Corpus				Wordbanks online			
	D-Noun	Verb	CP	Total	D-Noun	Verb	CP	Total
Cry	0	421(100%)	0	421	210(25%)	620(74%)	6(1%)	836
Laugh	2(3%)	74(97%)	0	76	113(14%)	713(85%)	12(1%)	838
Scream	1(5%)	19(95%)	0	20	89(24%)	288(76%)	0	377
Shout	0	102(100%)	0	102	44(12%)	312(88%)	0	356
Smile	20(35%)	35(61%)	2(4%)	57	561(33%)	1,123(66%)	11(1%)	1,695

わば後から出現した名詞であるから動詞に優位性があるのは当然ではあるが、日本人中高校生の動詞に対する極端な偏重は複合動詞を習得する以前に、動詞派生名詞の認識の欠如が疑われる。

一方、英語母語話者では smile は 34%, cry は 26%, scream は 24%, laugh は 15%, shout は 12% (D-Noun と CP との合算) と各動詞派生名詞に一定の使用が認められるが、複合動詞の使用はかなり低い。動詞派生名詞に限定をしても、身体活動を表す動詞派生名詞では英語母語話者でも laugh の 9.6% (総数 125 例中 12 例) を除けば積極的な使用は確認されない。次例参照。

- (2) a. They make our smile ..... maybe  
 b. We make smile and my [JP:”Irassiyaimase”]... (JEFLL)
- (3) a. Nora gives a stifled cry, runs across the room to the sofa table.  
 b. Finch gave a superior smile.  
 c. He gave a gentle laugh to cover his terror. (Wordbanks online)

### 3.3 身体動作 : escape, look, stop, visit, walk

表 2 に身体に関わる動作を表す動詞派生名詞、動詞及び複合動詞の頻度を示す。身体動作を表す動詞派生名詞は複数の基本動詞と共起する傾向にある。

日本人中高校生の動詞派生名詞の使用頻度は身体活動と同様に低く、当然複合動詞の使用も著しく低い。一方、英語母語話者では visit の動詞派生名詞と動詞の使用頻度は同じである (D-Noun と CP との合算)。

動詞を含めた総数で検証すると、全体的に複合動詞の使用頻度は英語母語話者でも極めて低いように見えるが、動詞派生名詞に限定をすると、look で 18% (総数 801 例中 144 例), escape で 9% (総数 157 例中 14 例), walk で 7.8% (総数 258 例中 20 例) 複合動詞での使用が確認される。名詞単独、あるいは他のコロケーション (e.g., by the look of, an escape of, in a walk, etc.) などの選択肢が

表 2 JEFLL Corpus と Wordbanks online における身体動作を表す動詞派生名詞、動詞及び複合動詞

	JEFLL Corpus				Wordbanks online			
	D-Noun	Verb	CP	Total	D-Noun	Verb	CP	Total
Escape	1(1%)	163(99%)	0	164	143(29%)	333(68%)	14(3%)	490
Look	17(2%)	724(98%)	0	741	657(8%)	7,531(90%)	144(2%)	8,332
Stop	2(2%)	118(98%)	0	120	180(8.3%)	1,983(91.3%)	8(0.4%)	2,171
Visit	3(2%)	127(98%)	0	130	374(48%)	388(50%)	18(2%)	780
Walk	7(1%)	416(95%)	16(4%)	439	238(16%)	1,245(83%)	20(1%)	1,503

ある中で複合動詞という構文に限定をしていることを考慮すれば、決して一概には低いと言えない。特に、look は複合動詞での使用が顕著であると言える。

日本人中高校生はその look でさえ動詞派生名詞での使用は僅か2%である。無論、look を動詞として使用すること自体に問題はないが、英語母語話者とは明らかに異なる文体で文章を書いていると言える。ただし、walk に限っては、低い頻度ながらも動詞派生名詞より複合動詞が多く観察される。その要因は、take a walk がイディオムとして記憶にしっかりと定着されているためと推察される。次例参照。

(4) a. One day, I was taking a walk.

b. I have taken a walk with my dog. (JEFLL)

(5) a. Let's take a brief look into the four forces, asking three questions.

b. The class decides that someone should make a personal visit to the teacher's family.

c. I wanted to see Mack before he made his nightly escape. (Wordbanks online)

### 3.4 知的活動 : answer, guess, order, report, talk

表3に知的活動を表す動詞派生名詞、動詞及び複合動詞の頻度分析の結果を示す。知的活動を表す動詞派生名詞 guess は、have, make, take と共起し、複合動詞のイディオム的な特徴が表れている。

表3 JEFLL Corpus と Wordbanks online における知的活動を表す動詞派生名詞、動詞及び複合動詞

	JEFLL Corpus				Wordbanks online			
	D-Noun	Verb	CP	Total	D-Noun	Verb	CP	Total
Answer	45(34%)	85(64%)	2(2%)	132	626(42%)	823(55%)	53(3%)	1,502
Guess	0	23(100%)	0	23	55(7%)	729(91%)	13(2%)	797
Order	16(80%)	4(20%)	0	20	901(66%)	432(32%)	30(2%)	1,363
Note	33(100%)	0	0	33	430(34%)	759(61%)	59(5%)	1,248
Doubt	1(50%)	1(50%)	0	2	234(50%)	185(39%)	52(11%)	471

知的活動を表す動詞派生名詞は、日本人中高校生でも answer, order, note において高頻度の使用が認められる。英語母語話者でも order と doubt では、動詞派生名詞が動詞を凌駕している (D-Noun と CP との合算)。日本人中高校生が示す高い使用頻度は、動詞派生名詞を意識した使用ではなく、すでにこれらの語が上述した smile 同様日本語にカタカナ英語として定着していることに

因ると考えられる。恐らく、note は日本語の「ノート」(ただし、英語の名詞 note と日本語の「帳面」との混同と推察される), order は日本語の「オーダー」, answer は日本語の「アンサー」が日常的に使用されていることで動詞に優先しているのであろう。事実、複合動詞の使用は answer の 2 例を除けば皆無である。

複合動詞に関して、英語母語話者では動詞派生名詞に限定をすると、guess で 19% (総数 68 例中 13 例), doubt で 18.2% (総数 286 例中 52 例), note で 12% (総数 489 例中 59 例) と一定の使用が認められる。特に、guess における複合動詞の顕著な使用頻度は、動詞派生名詞自体 1 例も使用が確認されていない日本人中高校生とは対照的である。単純動詞を好むか、複合動詞を好むかといった表現上の違いは文体上の問題であり文法的な誤りではないので、一見すると見落とされがちであるが、これらの数値から自然な英語表現の実現には一定の割合で複合動詞を使用することが望ましいと言える。次例参照。

- (6) a. I don't have the answer of this question, because I have many important item.  
 b. I don't have this answer. (JEFLL)
- (7) a. A person of an obliging disposition gives a peevish answer.  
 b. He made a note on the list he was holding.  
 c. Dwight had no doubts about his drinking. (Wordbanks online)

### 3.5 意志行為: care, hope, promise, try, wish

表 4 に意志行為を表す動詞派生名詞、動詞及び複合動詞の頻度分析の結果を示す。

表 4 JEFLL Corpus と Wordbanks online における意志行為を表す動詞派生名詞、動詞及び複合動詞

	JEFLL Corpus				Wordbanks online			
	D-Noun	Verb	CP	Total	D-Noun	Verb	CP	Total
Care	7(9%)	39(48%)	35(43%)	81	1,031(53%)	598(31%)	304(16%)	1,933
Hope	18(6%)	267(93%)	2(1%)	287	549(36%)	941(63%)	17(1%)	1,507
Promise	21(81%)	4(15%)	1(4%)	26	194(32%)	397(64%)	26(4%)	617
Try	0	372(100%)	0	372	28(0.8%)	3,747(99.1%)	4(0.1%)	3,779
Wish	6(6%)	93(94%)	0	99	173(19%)	708(78%)	23(3%)	904

意志行為を示す動詞派生名詞は、日本人中高生では promise だけが圧倒的な頻度で名詞として用いられている。一方、英語母語話者には promise にそのよ

うな偏重は観察されず、むしろ動詞の使用が64%占めている。また、hopeやwishは日本人中高校生では動詞の使用が圧倒的だが、英語母語話者ではhopeで37%、wishで22%（D-NounとCPとの合算）動詞派生名詞での使用が認められる。しかしながら、興味深いことに、careとtryには両者の間に共通点が見られる。日本人中高校生、英語母語話者ともに、careはそれぞれ52%、69%（D-NounとCPとの合算）で動詞派生名詞が確認され、逆に、tryはともに動詞の使用が圧倒的である。恐らく、日本人中高校生にとってcareは、複合動詞のtake care (of)がイディオムとして十分刷り込まれていることで、名詞で使用する際にはこの形式が最初に連想されるのであろう。事実、35例全てtake care (of)であった。ただし、英語母語話者では、take care (of)以外の複合動詞も確認されている（take care (of)が287例、have careが13例、give careが4例）。

動詞派生名詞に限定をすると、複合動詞に関して、日本人中高校生では83.3%（総数42例中35例）で生起するtake care (of)を除外すれば、promiseとhopeに僅かに確認されるに留まるが、英語母語話者ではcareで22.8%（総数1,335例中304例）、promiseで11.8%（総数220例中26例）、wishで11.7%（総数196例中23例）認められ、名詞単独での使用や他のコロケーション（e.g., in care of, a promise of, a wish list, etc.）などの選択肢を考慮すれば、決して低頻度とは言えない。次例参照。

- (8) a. I 'm taking care of rabbit every day.  
 b. And he wanted to take care of them.  
 c. He was so sad and had no hope in his life.(JEFLL)
- (9) a. Laura , come here and make a wish on the moon !  
 b. ...and McKee had a sudden wild hope that he would start it, climb in,...  
 c. A long time ago I made a promise. (Wordbanks online)

類義関係にある動詞派生名詞は同じ動詞と共に起る傾向があることについてはすでに言及したが、hopeとwishはともに願望などの意味を有するが、hopeはhaveとwishはmakeと共に起る。同じ願望でもその実現性に伴う動作主の負担に応じて動詞が選択されていると考えられる。負担が軽いものはhaveと、負担が重いものはmakeと共に起る傾向が観察される。

#### 4. 考察

本稿での分析結果から、日本人中高校生の動詞派生名詞と複合動詞の使用頻度の著しい低さは、英語母語話者と比較をすることでより明確になった。その要因として次の2つが考えられる。1つは、動詞と同形の動詞派生名詞に対する認識の低さが挙げられる。いわゆるアウトプットが主となる言語活動では、形式と意味の一致という点において、単純動詞を使用する方が複合的な構造を形成する複合動詞より使用者の負担は、はるかに少ない。ゆえに、まず動詞に意識が行く。加えて、織田(2014: 26)が提唱しているように、日本語は動詞や形容詞を中心に文を組み立てる言語であるが、英語は「名詞に依存する言語」であることを考慮すれば、日本人にはもともと動詞派生名詞は動詞より認識しづらいことになる。実際、この傾向は本稿で示された日本人中高生に観察された高い動詞志向性と合致する。日本語の干渉も複合動詞の習得を更に困難にしていると考えられる。<sup>4</sup>

もう1つは、基本動詞が文中で果たす文法的機能と意味の希薄化に対する知識の欠如が要因と推察される。<sup>5</sup> 複合動詞は主たる意味は動詞派生名詞が担い、基本動詞はいわば文法機能を果たしているにすぎない。それが日本人には理解し難いのである。例えば、「尋ねる」は *visit* と *make a visit*、「見る」は *look* と *take a look* の2つの形式がそれぞれ存在するが、前者は形式と意味との関係が明確であり日本人中高校生から見れば自信を持って使うことが可能だと思われる。しかし、後者では動詞 *make* の基本的意味である「作る」に引っ張られて「訪問を作る」、あるいは動詞 *take* の基本的意味である「持っていく」に引きずられて「見ることを持っていく」、というおかしな日本語が連想され日本人中高生たちに使いにくい印象を与えてしまっているのではないだろうか。堀(2009: 36-37)が指摘しているように、複合動詞の動詞を1つの最も基本的意味に限定をしてしまうとその後に出会う「他の意味の理解が困難」になることが考えられる。

複合動詞を使用構文へと昇格させるには、基本動詞の文法的役割と動詞派生名詞の意味的役割を理解させるだけでなく、複合動詞の統語上の柔軟性、対応する単純動詞の不在、韻律上の優位性など使用に伴う労力に値するメリットを生徒に教授することが必要であると考えられる。

どの基本動詞がどの動詞派生名詞と共起するかはイディオムの領域、つまり暗記とされているが、類義関係にある動詞派生名詞は同じ基本動詞を取る傾向

が観察される。例えば, cry, shout, scream, cough など身体の中から出るような negative な行為は give と共起するが, smile, laugh など positive 行為は have と共起する。また, 同じ意志行為でも wish, promise は make と, hope は have と共起する。前者は make 「何かを作り出す」, つまり動作主にかかる負荷に見合う意志行為と共起し (e.g., make an attempt, make an effort, make a success (of), etc.), 後者は have 「所有する」, つまり make ほど動作主には負荷がかからない意志行為 (e.g., have intention (of), have disregard (for), have a thought (of), etc.) と共起する傾向にあると考えられる。「約束」や「実現可能性が低い願望」より「実現可能性を含意する期待」のほうが動作主にかかる負荷は軽い。

複合動詞を構成する基本動詞は限られているが, 動詞派生名詞は数多くある (1.2 節を参照)。このような生産性を享受するには, 1 つ核となるプロトタイプの的なパタンの習得が鍵となる (3.1 節の take medicine の例を参照)。それを獲得できれば, 類推・推論といった認知機能を働かせながら他の複合動詞を習得することが容易になると思われる。<sup>6</sup>

一方で, 動詞派生名詞は複数の基本動詞と複合動詞を形成することは珍しいことではない。例えば, end は make, have, give, take と共起する。これもまた複合動詞の生産的な一面であることを注意しておきたい。

コロケーションは, gradience (段階性) を有しており, kick the bucket から take a look まで統語的にも意味的にもその結束性は段階的である (Quirk et al., 1985: 1162) ことを早期から学習することが望ましい。特に, 複合動詞は意味の透明性において句動詞より習得にかかる英語学習者の負担は軽い。

## 5. 結論

本稿では, 複合動詞に関して英語母語話者と比較した結果, 日本人中高校生の使用頻度の低さ, 使用パタンの違い及び動詞派生名詞に対する低い認識が認められた。複合動詞は単純動詞には見られない韻律的・統語的利点を数多く有している。加えて, 意味の透明性は習得にかかる負担を軽減させると推察される。複合動詞のこれらの利点を考慮すれば, 複合動詞を自在に運用できる能力は英作文に文体的ヴァリエーションを与えるだけでなく英語でのあらゆる言語活動にも有益であると言える。

一方で, 複合動詞を含めコロケーションの習得は英語学習者にとってかなり手強い壁である。コロケーションは一見すると構造が単純ゆえに習得が容易で

話法・態・仮定法ほど重要とは思われない。文法は規則があり教えやすいが、コロケーションにもある程度のパターンは見られるものの、その膨大な数とイディオムの意味（構造による）が学習を困難にさせる。英語教師は暗記の前提として複合動詞の構造をしっかりと理解させ、その生産性を享受させるために類推や推論といった作業が暗記学習と等しく言語習得には必要不可欠であることを生徒と共有することが重要である。その認識がパターン学習から創造的学習への転換の鍵となると提唱したい。

本稿で扱えなかった接辞化を伴う動詞派生名詞の検証は今後の課題としたい。

## 謝 辞

本稿の執筆に際し、大変貴重なご助言とご示唆を賜りました査読委員3名の先生方に心より感謝申し上げます。

## 注

1. JEFLL Corpus では、品詞検索を用いて動詞と名詞を検索することは可能であるが、文法的な間違いをコンピューターが認識できず誤ったタグを付ける可能性がある（投野（編），2007：148-149）。本稿のデータでも名詞と動詞の混同が確認されたため、手動による分析を行った。更に、JEFLL Corpus と Wordbanks online の検索に関して、動詞を指定して品詞検索をかけると現在分詞も過去分詞も当然ヒットするが、この V-ing と V-en 形は、動名詞、形容詞用法も含まれる。形式での検索には限界があり、文の解釈や機能に基づく検索は厳しいため、V-ing と V-en 形は、再度手動での分析により動名詞と形容詞用法は除外した。
2. 学習者コーパスと一般の英語コーパスを比較した研究は、Biber and Reppen (1998), JEFLL Corpus と一般の英語コーパスは、飯尾 (2013), 内田 (2014), Satake (2015) などがある。
3. Wordbanks online のサブコーパスは新聞・パンフレット類・本・雑誌まで多岐に及んでいる。本より雑誌の文体の方が日本人中高校生のレベルにより近いと思われるが、男性誌であることを考慮し、本稿ではアメリカ英語で書かれた本を選択する。
4. Nesselhauf (2000: 231, 239) は、基本動詞の選択の幅と英語学習者の母語が複合動詞の使用を困難にさせていると論じている。実際にドイツ語を母語とする英語学習者はドイツ語の複合動詞の干渉により (e.g., *hausaufgaben machen* 'make homework' in German, but in English 'do homework'), 誤った複合動詞 (\*make homework) を生成する傾向が報告されている。英語学習者の母語の構造を考慮することも複合動詞の習得には欠かせないと言える (cf. De Cock, 2000: 64-65)。
5. 投野（編）(2007: 40, 67-87) の調査によると、JEFLL Corpus における高頻度動詞の内、基本動詞 (do, give, have, make, take) が全て上位40にランクインしていたことが示されている。従って、基本動詞の積極的な使用が複合動詞へと発展しない

要因は、基本動詞の文法的機能と動詞派生名詞の認識不足と推察される。

6. Nesselhauf (2003: 239) によれば、類義関係にある名詞ならば常に同じ動詞と共に起すとは限らない(e.g., run the risk (of), \*run the danger (of), \*run the peril (of))。ゆえに、動詞が自由に生起できないこともきちんと理解しておくことが重要であると指摘している。

## 参考文献

- Aijmer, K. (2001) "Modality in Advanced Swedish Learners' Written Interlanguage." In Granger, S, J. Hung and S. Petch-Tyson (eds.), *Computer Learner Corpora, Second Language Acquisition and Foreign Language Teaching*. Amsterdam: John Benjamins, pp. 55-76.
- 相沢佳子 (1999) 『英語基本動詞の豊かな世界』開拓社.
- 秋元実治 (編) (1994) 『コロケーションとイディオム－その形成と発達－』英潮社.
- Biber, D. and R. Reppen (1998) "Comparing Native and Learner Perspectives on English Grammar: A Study of Complement Clauses." In Granger, S (ed.), *Learner English on Computer*. London: Longman, pp. 145-158.
- Brinton, L. J. and M. Akimoto (1999) "Introduction." In Brinton, L. J. and M. Akimoto (eds.), *Collocational and Idiomatic Aspects of Composite Predicates in the History of English*. Amsterdam: John Benjamins, pp. 1-20.
- Clardige, C. (2000) *Multi-word Verbs in Early Modern English*. Amsterdam: Rodopi.
- De Cock, S. (2000) "Repetitive Phrasal Chunkiness and Advanced EFL Speech and Writing." In Mair, C and M. Hundt (eds.), *Corpus Linguistics and Linguistic Theory*. Amsterdam & Atlanta: Rodopi, pp. 51-68.
- Dixon, R. M. W. (1991) *A New Approach to English Grammar, on Semantic Principles*. Oxford: Oxford University Press.
- Hill, J. (2000) "Revising Priorities: from Grammatical Failure to Collocational Success." In Lewis, M. (ed.), *Teaching Collocation*. Hove: Language Teaching Publications, pp. 47-69.
- 堀正弘 (2009) 『英語コロケーション研究入門』研究社.
- 飯尾豊 (2013) 「コーパスを用いた日本人学習者の句動詞の使用に関する研究」『熊本大学社会文化研究』第 11 号：35-53.
- Koskenniemi, I. (1977) "On the Use of Verbal Phrase of the Type 'to take revenge' in English Renaissance Drama." *Poetica* 7: 80-90.
- 小屋多恵子 (2015) 「英語教育とコロケーション」堀正弘 (編) 『これからのコロケーション研究』ひつじ書房, pp. 23-60.
- Koya, T. (2004) "A Comparison of Verb-Noun Collocations in Collected from Revised High School English Textbooks in Japan." 『早稲田大学大学院教育学研究科紀要』11 (2): 55-70.
- Lewis, M. (2000) "Learning in the Lexical Approach." In M. Lewis (ed.), *Teaching Collocation*. Hove: Language Teaching Publications, pp. 155-185.
- Live, A. H. (1973) "The *take-have* Phrasal in English." *Linguistics* 9: 31-50.

文部科学省 (2017) 『中学校学習指導要領解説 外国語編』

([http://www.mext.go.jp/component/a\\_menu/education/micro\\_detail/\\_\\_icsFiles/afieldfile/2017/07/25/1387018\\_10\\_1.pdf](http://www.mext.go.jp/component/a_menu/education/micro_detail/__icsFiles/afieldfile/2017/07/25/1387018_10_1.pdf))

Nation, I. S. P. (2001) *Learning Vocabulary in Another Language*. Cambridge: Cambridge University Press.

Nesselhauf, N. (2003) “The Use of Collocations by Advanced Learners of English and Some Implications for Teaching.” *Applied Linguistics* 24, 2: 223–242.

Nickel, G. (1968) “Complex Verbal Structures in English,” *IRAL* 6: 1–21.

Nunburg, G., I. A. Sag and T. Wasow (1994) “Idioms.” *Language* 70: 491–538.

織田哲司 (2014) 「なぜ now that には that が付いているのか？」『英語教育』63 卷 6 号 : 26.

Quirk, R, S. Greenbaum, G. Leech and J. Svartvik (1985) *A Comprehensive Grammar of the English Language*. London: Longman.

Satake, Y. (2015) “Verb-Noun Collocations and Combinations in the Corpora of Japanese English Learners.”『情報学研究』4 号 : 118–125. 獨協大学情報学研究所.

Sinclair, J. (1991) *Corpus Concordance Collocation*. Oxford: Oxford University Press.

投野由紀夫 (編) (2007) 『日本人中高生一万人の英語コーパス』小学館.

Traugott, E. (1999) “A Historical Overview of Complex Predicates Types.” In Brinton, L. J. and M. Akimoto (eds.), *Collocational and Idiomatic Aspects of Composite Predicates in the History of English*. Amsterdam: John Benjamins, pp. 239–260.

内田富男 (2014) 「コーパスと英語教育語彙表における基本色彩語の考察—BNC, JEFLL Corpus, CEFR(-J) を用いて」『明星大学研究紀要』第 50 号 : 19–32.

Wierzbicka, A. (1982) “Why Can You Have A Drink When You Can’t \*Have An Eat?” *Language* 58: 753–799.

山本史歩子 (2017) 「大学生の英作文におけるコロケーション」『青山学院大学 教職研究』第 3 号 : 317–327.

(青山学院大学 Email: syamamoto@ephs.aoyama.ac.jp)

